

「主のしもべの歌」(後半B)

「イザヤ書」からの説教 (No.9)

【聖書箇所】 53章1～12節



ベレーシート

- 前回は、第四の「主のしもべ」の序文ともいうべき部分を扱いましたが、今回はその本文であるイザヤ書 53 章 1～12 節を取り上げます。そこに入る前に、このイザヤ書 53 章を讀んでいて、そこに記されている「しもべ」である「彼」という人物がメシアであるイエシュアだと教えられて、信じて洗礼を受けた人物がいます。その人物とは、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官(エチオピア人)です。この話は新約聖書の使徒の働き 8 章 26～40 節に記されています。
- このエチオピア人の宦官の救いの話は個人伝道のテキストとしてしばしば用いられますが、この出来事をヘブライ的・ユダヤ的視点から見ると、驚くべきことが啓示されています。エチオピア人の宦官は、主を礼拝するためにはるばるエルサレムへ来ていたのです。距離にしてざっと片道、北海道から静岡あたりまでの距離です。そしてイザヤ書の巻き物を買ったと思われます。彼は、帰途につく馬車の中でそれを讀んでいたのですが、はからずも、その讀んでいた聖書の箇所がイザヤ書 53 章だったのです。しかも、主の使いがピリポという人物と宦官を出会わせるために、絶妙なタイミングで導いておられたのです。
- 新約聖書には「ピリポ」という人物の名前があります。一人は 12 使徒の「ピリポ」、もう一人は初代教会で選出された 7 名の執事の中の「ピリポ」です。エチオピア人の宦官をイエシュアによる救いへと導いたのは、後者のピリポです。伝道者ピリポがエチオピア人の宦官に出会ったことは決して偶然ではなく、神の必然のご計画であったことが分かります。それは、ピリポが主の御使いによって「ガザに下る道に出よ」と語られたからです。

【新改訳改訂第 3 版】使徒の働き 8 章 29～39 節

- 29 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい」と言われた。
- 30 そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、
「あなたは、讀んでいることが、わかりますか」と言った。
- 31 すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」と言った。
そして、馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。
- 32 彼が讀んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほぶり場に連れて行かれる
羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなか
った。
- 33 彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。
彼のいのちは地上から取り去られたのである。」
- 34 宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。
自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」
- 35 ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。
- 36 道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるの



に、何かさしつかえがあるでしょうか。」

38 そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。

39 水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。

●イザヤ書 53 章に登場する「主のしもべ」はだれのことかと質問されたときに、ピリポが即座にそのしもべが「イエシュア」であることを教えています。つまり、ここでの「しもべ」が神の御子イエス・キリストであるという解釈は、エルサレムの教会、つまり使徒たちの見解です。使徒的権威の下でピリポが答えているということです。初代教会においては、すべての弟子たちが「使徒たちの教えを堅く守って」いたのです。それほどに使徒たちに与えられた権威は大きかったと言えます。教会の内部に様々な問題が生じたときにも、使徒たちは「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。」と述べ、教会の問題に対処するために、聖霊と知恵とに満ちた評判の良い人七人を選ぶようにし、自分たちは「もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにする」という提案は、単なる働きの分担を導入したということだけでなく、教会における使徒性とその権威を確立させていく務めを優先させ、そこに専心するためと考えられます。伝道者のピリポはその権威の下で、使徒たちの旧約聖書の解釈をエチオピアの宦官にしたことが重要な点です。

●もうひとつ、この箇所における重要な点は、「宦官」が救われているということです。なぜ「宦官」がここで登場しているのか。そこには深い真理が啓示されています。申命記 23 章 1 節には、「こうがんのつづれた者、陰茎を切り取られた者は、【主】の集会に加わってはならない。」とあります。主の集会には加えられなくとも、神に対する信仰は熱心で、おそらく神殿の「異邦人の庭」で礼拝し、かつ神のみことばが記された巻物を買うことができた裕福な人でした。伝道者ピリポのイザヤ書の解き明かしによって、彼はイエシュアをメシアとして信じ、バプテスマを受けました。この出来事は新しい時代が到来したことを物語っているのです。イザヤ書 56 章 3～5 節にこうあります。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 56 章 3～5 節

3 【主】に連なる外国人は言ってはならない。「【主】はきっと、私をその民から切り離される」と。宦官も言ってはならない。「ああ、私は枯れ木だ」と。

4 まことに【主】はこう仰せられる。「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶ事を選び、わたしの契約を堅く保つ宦官たちには、

5 わたしの家、わたしの城壁のうちで、息子、娘たちにもまさる分け前と名を与え、絶えることのない永遠の名を与える。

●新しいメシアの時代には宦官も主の集会に加えられることが約束されているのです。このイザヤ書の箇所をピリポが示したかどうかは記されてはいませんが、もし教えたとすれば、宦官はきっと感動したはずで、「私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」という発言もその箇所を読んだことを示唆する発言かもしれません。この出来事はまさにイザヤが預言した新しい時代が到来している象徴的な出来事です。やがてエチオピアという国はキリスト教国となって行きます。その最初のキリスト者がここに登場した宦官であったのかも知れません。

1. 主のしもべの生い立ち(イザヤ書 53:2~3)

●2~3 節には「主のしもべ」のプロフィールが預言されています。その生い立ちと面影、そして人々から受ける苦難についてです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 53 章 2~3 節

2 彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。

3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。

(1) 生い立ち

●聖書の預言によれば、主のしもべの生い立ちは「主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。」ということです。神の目にはこのしもべは「主の前に」生き抜く存在として、若枝のように芽生えるのですが、人々の目には「砂漠の地から出る根」のように見えたのでした。それは決して目立つことのない姿として育つことを意味しています。

●旧約聖書で「新芽」「若芽」「若枝」という語彙はメシアを意味する表現です。イザヤ書 53 章 2 節の「若枝」のヘブル語は「ヨーネーク」(יֹנֵק)で、この箇所にもみ使われている語彙です。イザヤ書 11 章 1 節で「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ」と預言されているように、「新芽」も「若枝」も「メシア」を表す用語の一つです。イザヤ書 11 章 1 節にある「新芽」は「ホーテル」(חֹטֶר)、若枝は「ネーツェル」(נֶצֶר)ですが、「若枝」の概念としては、「ヨーネーク」(יֹנֵק)であっても、「ネーツェル」(נֶצֶר)であっても、いずれも同じです。

●ちなみに、イエシュアがなぜ「ナザレ」という小さな貧しい村で育ったのかというと、「ナザレ」が「ネーツェル」に由来するからです。イエシュアは預言されていたとおりに「ベツレヘム」で生まれました。しかし、育った場所は「ナザレ」という貧しい村です。マタイの福音書 2 章 23 節に「そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して『この方はナザレ人と呼ばれる』と言われた事が成就するためであった。」と書かれています。しかしそのように預言されている箇所を旧約聖書で見つけることはできません。どのようにして、預言されていたと分かるのでしょうか。それは、エッサイの根株から出る「新芽」、すなわちエッサイの子孫から出る一つの「新芽」が「ネーツェル」(נֶצֶר)という語彙であり、ギリシア語の「ナザレ」をヘブル語に訳すると「ナーツラット」(נְצֻרַת)となります。「村(町)」が女性名詞であるためにこのような表記になりますが、その語根は実は同じ(נצ)です。

●重要なことは、「主のしもべ」が、ガリラヤにある貧しい小さな村である「ナザレ」で育ったという事実なのです。当時のユダヤ人の社会では「ガリラヤ」の出身というだけでも軽蔑の目線でした。ましてやその中の「ナザレ」に対するイメージも、そして「ナザレ人イエシュア」に対する目線もなおさらのことでした。ですから、イエシュアの弟子となるナタナエルは「ナザレから何の良いものが出るだろう」と言ったのです(ヨハネ 1:46)。ナザレ出身のイエシュアは当時のユダヤ社会の人々から見れば、「田舎者」でしかなかったのです。田舎から都

「新芽」と「ナザレ」は同語根を持つ

נצ

会に出て来た者に対する**地域的偏見(バリア)**は、ナタナエルの評価と同様に、今日の現代社会においても何ら変わりありません。

(2) 主のしもべの容貌

●2節を見ると、主のしもべには、①「見とれるような姿がない」②「輝きがない」③「人が慕うような見ばえがない」とあります。面影、風格、容姿においてまさに落第なのです。この世の価値観からすれば、評価すべきものが何一つ「ない」のです。原文では、主のしもべである「彼には」、①「姿がない」②「輝きがない」③「慕うべき顔立ちがない」となっています。

●「顔立ち」(「マルエー」**מַרְאֵהוּ**)については、52章14節にも同じ言葉があります。そこでは受難にあったしもべの顔立ちが人のようではないほどであったことが記されていますが、53章2節では正常時の顔立ちも決してハンサムではなかったことを記しています。当時の人々はイエシュアの顔立ちを見ていたはずですが、それについての情報は聖書には皆無と言っていいほどありません。

●イエシュアを題材にした映画では、イエシュアを演じるほとんどの俳優の顔立ちはなかなか立派なものです。そうでないと、観客を得ることができず、興行は赤字になってしまう懸念があります。イエシュアを信じ愛する者にとっても、イエシュアの顔立ちはすばらしいと思いたい心理が働きます。しかし、主のしもべであるメシアの顔立ちは良いとは言えないようです。むしろ、主は人の心を見ます。神は決してうわべを見ない方であり、「わたしは・・・人が見るようには見ない。」とも断言しておられます(Iサムエル16:7)。



(最近製作された映画「Son of God」)

●いつの時代においても、多くの人々が自分の容姿や顔立ちにコンプレックスを抱いています。それは人間的な価値観で自分を見ているからです。それゆえ、イエシュア・メシアの顔立ちが良いとは言えないということの中に神の配剤を信じます。それは、彼の存在が人間的な価値観によって左右されないための神の配剤であり、また、そのことで悩んでいる多くの者たちとの連帯や共感を得ることができるからです。

(3) 人々からの完全な拒絶

●3節に「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちが彼を尊ばなかった。」とあります。「さげすまれ」という言葉が二度も繰り返されます。確かに、イエシュアは当時のパリサイ人、サドカイ人、ローマ人によって軽蔑の対象となりました。その公生涯で、特に死においては最高度の侮辱を受けました。また、身体的、精神的な面において、ありとあらゆる痛みを受け、傷を負いました。これらはすべて預言者イザヤによって預言されていたのです。

2. 「主のしもべ」の自発的、主体的な受難

【新改訳改訂第3版】イザヤ書53章4～6節

4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。

だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。

しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

●イザヤ書 53 章 4～6 節は「神の恵みの福音」の真髄が預言されている箇所であり、イエシュアの十字架による代償的苦難と死を予告している重要な箇所です。これまでもこの箇所は何度も味わってきましたが、原語で味わってみる時、あらためて贖罪的苦難の意味を明確にさせられます。「主のしもべ」はここに来てはじめて、しもべの受難の目的が何であったのかを知ることができます。4 節だけを注目してみると、そこにある動詞はみな分詞で使われており、すべて能動態の分詞です。

① 「彼は・・・私たちの病を負い」・・・「私たちの病を負った者」

② 「彼は・・・私たちの痛みをになった」・・・「私たちの痛みをになった者」

●イザヤは罪を「病」(「ホリー」**חָלִי**)としています。罪は病気なのです。罪は死をもたらす感染力の強い病であり、その病をいやすことができるのは神のみです。「痛み」(「マフオーヴ」**מַאֲוֵב**)は、罪がもたらす様々な悲しみや心痛を意味します。「病」も「痛み」もいずれも複数形です。それらを主のしもべは自ら「負い」、「になつた」と預言的完了形で表わされています。「負う」という動詞は「ナーサー」(**אָשַׁר**)で、本来は「上げる、持ち上げる」という意味ですが、これが「罪を赦す」という意味にもなります。「になう」と訳された「サーヴァル」(**סָוַר**)は旧約で 9 回使われていますが、そのうち 5 回がイザヤ書です。46 章 4 節では「あなたがたがしらがになつても、わたしは背負う」とあり、53 章 11 節でも、主のしもべは「彼ら(多くの人の)咎をになう」とあります。いずれも神の恩寵を表しています。しかしながら、偶像の神は反対に人々に背負われる神です。

●さて、ここで重要なことは、主のしもべが「自ら主体的に」人々の病を負い、痛みをになうことが記されているのは、**四福音書**ではヨハネだけです。**手紙**では使徒ペテロも同様に、以下のようにイエシュアの**主体的受難**を記しています。

①ヨハネの福音書 10 章 17～18 節

17 わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。

18 だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。

わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」

② I ペテロの手紙 2 章 22～24 節

22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。

24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

●ところが、「私たち」はそのようには思わず、彼は神からの懲罰的苦難を受けたと考えたのです。ここに登場する「私たち」は、イザヤを含めたすべての人間を含んでいる「私たち」と考えられます。その「私たち」の真相が 6 節で表現されています。そこには「私たち」がひとりの例外もなく、「羊のようにさまよい」「おのおの、

自分かってな道に向かって行った」と記されています。羊のようにさまようとは、さまよった羊は決して自分の力で戻ってくるできないことを意味し、また「さまよう」とは「自分勝手な道に向かって行く」ことであり、同じ運命にあることを示唆しています。

3. 主のしもべの受動的受難

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 53章 5節前半

5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。

●イザヤ書 53章 5節では、主のしもべの受ける苦難が決して「主のしもべ」自身ゆえのものではなく、あくまでも、「私たちのそむきの罪のために」、「私たちの咎のために」とあるように、代償的な(身代りの)苦難であり、そのために主のしもべは「刺し通され」「砕かれた」のです。そのいずれもが受動的表現であることに注目しなければなりません。使徒ヨハネや使徒ペテロが理解しているイエシュアの苦難は積極的な苦難であるのに対し、共観福音書では受動的苦難、すなわち、受難を告知しています。

①マタイの福音書 16章 21節

その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。

②マルコの福音書 8章 31節

それから人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに、捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。

③ルカの福音書 9章 22節

人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。

●ちなみにイザヤ書 53章、5節の「そむきの罪」は「ペシヤー」(פֶּשְׁיָא)で、神の律法の教えを破ることを意味します。「咎」は「アーヴォーン」(אֲוֹן)で、本来は「ゆがむ」の意で「不義」とも訳されます。いずれも罪を表わす語彙で複数形です。ちなみに、単数形で表わされる罪の場合は「原罪」を表わし、ヘブル語では「ハッター」(חַטָּאת)を使います。

3. 代償的贖罪(身代わりの死)がもたらしたものと

●6節に「主」は「主のしもべ」に「すべての咎を負わせた」とあります。ここですべての出来事の仕掛け人が「主」であることが明らかにされます。「主のしもべ」が自ら積極的に苦難を負うことも、また受難も、その後主のご計画があります。「主は、すべての咎を彼に負わせた」のです。

●この「負わせる」という動詞は「パーガア」(פָּגַע)のヒフィル(使役)態ですが、本来は「会う、出会う、とりなしをする、着く、達する」という意味です。神のもとからさまよい出た者を、再び、神と出会わせるために、だれかがとりなし的な働きをすることを意味します。いみじくも、この「パーガア」は53章 12節の最後に「彼

は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする」という訳で使われています。「罪を負う」の「負う」も「赦す」という意味。つまり、人間の犯した罪を負うことで、その罪が赦されるために、とりなしをする「主のしもべ」に焦点が当てられているのです。

●主はその働きをご自分のしもべに「負わせた」ということとなります。しもべの側からすれば「負わせられた」ということとなりますが、負わせる側もその務めには多大な苦難を伴うことを知った上で「負わせた」のです。
主と「主のしもべ」のかかわりが愛と信頼で結ばれていなければこのことはできません。

(1) 「平安」(シャーローム)

●しもべによる身代わりの苦難と死がもたらすのは、「平安」です。「平安」の原語は「シャーローム」(שָׁלוֹם)です。この語は神が人に与える祝福の総称です。神と人との間にある障害を取り除いた結果としてもたらされるものです。主との和解による結果としての祝福のすべてがこの一語(単数形)で言い表されています。

(2) 「いやし」

●しもべによる身代わりの苦難と死がもたらすのは、「いやし」です。「いやし」の原語は「ラーファー」(רָפָא)です。罪が病であるならば、罪から解放されることは「いやし」になります。この「ラーファー」が聖書で最初に使われているのは創世記 20 章 17 節ですが、そこでは、アブラハムが神に祈った(とりなした)ことで、「神はアビメレクとその妻、および、はしためたちをいやされたので、彼らはまた子を産むようになった」とあります。「とりなし」と「いやし」は密接に結びつけられています。

4. 「主のしもべ」の黙従

●使徒の働き 8 章で登場したエチオピア人の宦官が読んでいたイザヤ書の箇所は、53 章 7 節の後半の部分です。7 節は同義的パラレリズムで記されています。7 節には、黙って従う「主のしもべ」の姿があります。それは苦難の中にあっても、一切「口を開かない」という表現で表されています。「口を開かない」という表現は、自分で自分を弁護しようとしません。一切の不当な扱いに対して抗議をしないことです。この黙従の中に、4 節で見たように、しもべが自ら主体的に苦難を受ける姿があります。

●ヘブル人への手紙 5 章 8~9 節には「キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ」とありますが、黙従は神への全き信頼と同義なのです。「主のしもべ」の「黙従」の様子を、「ほふり場に引かれて行く羊のように」、「毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように」と表現しています。「羊」とか「雌羊」とかの表現は神へのいけにえと関係があり、「主のしもべ」が受ける苦難と死は、そむきの罪と咎のための罪過としてのいけにえであることが示唆されています。神にささげられるいけにえは、完全なものでなければなりません。一点の傷もあってはならないのです。つまり、神への信頼という点において完璧でなければならなかったのです。

5. 主のしもべの受難は主のみどころであった

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 53 章 10 節

しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみどころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえと

するなら、彼は未長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。

●10 節にある特徴は、主の「みこころ」(新改訳)と訳された語彙が 2 回使われているということです。前者は動詞の「ハーフェーツ」(יָרַח)。後者は名詞の「ヘーフェツ」(יָרַח)です。動詞の「ハーフェーツ」(יָרַח)は、「みこころであった」のほかに、「望まれた」「志とした」「欲した」「喜んだ」とも訳されます。名詞の「ヘーフェツ」(יָרַח)は、「みこころ」の他に、「望まれること」「志」「欲するところ」「意にかなうこと」とも訳されます。「ハーフェーツ」も「ヘーフェツ」も主ご自身の喜びが込められた御旨そのものを表す語彙です。

●しかも、主のみこころは二つのことを含んでいます。

【第一のみこころ】・・・**主**が、その民の咎の償いのために「主のしもべ」を打ち砕くことです。

【第二のみこころ】・・・**主のしもべ**が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとすることによって、

彼は未長く、子孫を見ることができるといことです。

●ここに神の愛を見ることができます。**主の民のために、主と「主のしもべ」が苦しみを受けるという愛です。**最も大切なものを子に与えようとする親の強い愛の意志です。これが動詞の「ハーフェーツ」(יָרַח)の持つ意味と言えます。「ハーフェツ」の愛・・・この愛は、神が喜んで最も良いものを惜しみなく与えようとする愛です。そもそも天の父は、その子どもたちに良いものを惜しみなく与えることを何よりも喜びとされる神です。どんな犠牲をも惜しまずに与えるこの神の愛の意志こそ「ハーフェツの愛」なのです。

6. 「主のしもべ」は、苦しみのあとを見て満足する

●それゆえ、「彼(主のしもべ)は、自分のいのちの激しい**苦しみのあと**を見て、満足する」(11 節)のです。ちなみに、新改訳は「苦しみのあとを見て」と訳していますが、新共同訳では「**苦しみの実り**を見」と訳し、口語訳(フランシスコ会訳、バルバロ訳)では「**苦しみにより光**を見て」と訳しています。原文には、主のしもべが「何を見た」のか、その対象となる語彙(目的語)がないために、いずれの聖書もその目的語になるものを補って訳しています。

●主のしもべが苦しみを通して見たものは何か。その解釈はさまざまであったとしても、苦しみの結果として、主のしもべが「満足する」「満ち足りる」(「サーヴァア」יָרַח)ことには変わりありません。この満ち足りる気持ちは、イエシュアが十字架に掛かれる前に弟子たちに語ったことばー「女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます。」(ヨハネ 16:21)という、子を産んだ母のイメージに例えられます。

●イザヤ書 53 章は、まさに神の御子イエシュアによる「**神の恵みの福音**」を預言している旧約聖書の中で最も重要な箇所なのです。この「神の恵みの福音」を聞いてイエシュアこそ唯一の救い主であると信じるのでなければ、だれ一人として「**御国の福音**」にあずかることはできないのです。「神の恵みの福音」は「御国の福音」においてはからし種程度の祝福です。神が創造のわざを終えた時に、神が仰せられた「はなはだ良かった」(「トーヴ・メオッド」)の世界への回復は、「からし種」が「大木」になるほどの世界なのです。 【2014. 11.23】